1970.7.2 明治大学新聞

6・12 襲撃事件

事件の経緯を追ってみると――

学苑会学生大会の前日の十日、ML派執行部は、①今年度の予算は二部文自治会、および二部政経自治会へは交付しない（約七〇万円の借金のためという理由）②反帝学評系を中執委員に加えない――旨を二部文部自治会へ申し渡した。これがその発端である。

これに対し、反帝学評系は学苑会大会当日の午後五時半、問題の「対案議案書」を中執に提出した。大会が始まる直前の午後六時四十五分、ML派は「人事案」がもられていない旨を発したが、その場で両派折衝した結果、大会途中に提出してよい事を確認した。

大会が開始され、議事に入ろうとした時、委員長の桜田豊吾（II文四年）が「大会開始前に、『対案議案書』が提出されているはずであるから、まずその事を発表してもらいたい」旨を発言した。その後は次の通りである。

資格審査委員長が対案に関する経過発言、および「人事案が出されていないので受理しない」と発言。

会場から「人事については大会中途で提出してよいと通ったではないか」の声。

十五分休憩――

桜田議長降壇。

本間中執副委員長「人事案が欠けているので、対案として認められない」ことを説明。

議事進行。経過報告、総括。

一代議員が対案書に対するその後の取り扱いについて質問。

中島資格審査委員長が答弁。

「審査委員六名中、受理三名、受理しない三名のため、委員会で断はドせない」

九時半、二度目の休憩。

再開、九時五十分。採決に決まり、議場を閉鎖。

採決の結果は賛成六四名、受理しない一四名で、対案書を取り上げることに決定。

◇　◇

以上が大会のあらましの経過である。

そして翌十二日、ML派の襲撃模様は次の通り。

午後六時二〇名、II文四、II文二年、II部文学二年、II部仏文一年および II部国文の約三〇人の学生が、五号館地下二階の学生控室で、当日の継続大会に向け最加態度を協議していた。そこへ、ヘルメット、竹ザオ、角材、チェーン、コーラ瓶などで武装した他大学生を含む約三〇人のML派学生がなだれ込んだ。その場に居合わせた学生の話によると、II文自治会執行部、対案書を提出した者は、特にネラワれたようである。その結果、内臓破裂のおそれがある者を含む重傷者十数人を出し救急車で近くの病院に運び込まれた。

☆　☆

六月十二日の反帝学評に対する「ML派襲撃事件」はショッキングだった。最近、本学で発生した内ゲバの中でも特筆すべきものである。学園紛争時の昭和四十一年十月、ML派は民青系から学苑会中執をとって代った。以来反日共系と民青系との攻防はいくたび繰り返されてきたが、この事件は、はじめての学苑会中執をめぐる反日共系同士の抗争である。

ML派が獲得学苑会――といっても、実はML派が学苑会中執の委員をすべて独占していた訳ではない。「反民青」で一致している反帝学評（二文自）、「反帝戦線（二政経自）が結び、それぞれがポストを分け合ってきた。

今回の事態は、反帝学評が提出した「対案書」の問題がML派にとって不利な展望をさせたからである。反帝学評がなぜ、対案書を提出したのか。それは次の通り、千載一遇分断策と中執入場阻止のため、その真意は定かではない。中執委員独占ほもちろん学苑会完全支配を意味する。

襲撃事件の余波は、今のところML派にとって、"悪しき状況"が続いている。五号館で暴行を受けた中はノンセクトの学生もいたことから、反帝学評を中心に、「反ML」で固っている。

ML派が襲撃事件に関する責解を出しているので、みてみよう。

「ML派に対する疑問に答える――学生大会流会の原因と政治的克服のために――」というビラである。

まず最初に「大会開催を不能に至らしめたことを深度におわびします」と謝罪している。「対案書」については次のようにいっている。「『対案』なるものは執行部の提起してきた運動を全面的に否定したときに初めて出されるものである。だから彼ら（反帝学評）が対案書を提出したことは、彼ら自身も参加している中執、自らも展開してきた運動をも否定している。また、全二部共闘に対する全面的敵対行為として、このこと（対案書提出）をとらえたが故に、翌十二日われわれのゲバルトを行使があったのである」と、対案書提出敵対視をとっている。また、対案書の内容についても「たとえ、なんらかの民青系の運動の現実的展開が全面的反革命として、提案した時、対案の中に暴力的敵対が不可避とされたように、学苑会中執および二部共闘の一切の運動に対する全面対決としてあった」としている。

対案書が本来執行部に対する全面的敵対行為としてあるものであるというが、何ゆえML派の出してきた本案、中執の独占問題は、反帝学評にしてみれば、同じように全面的敵対行為としようったことになろう。対案書はすべて敵対行為であると判断し、切り捨てようとするなら、二部全学生を代表しその運動を展開すべき学苑会執行部として無責任すぎる感がある。ML派が中執入場をもくろむ余りに、わざわざ出たようとしたとき、その故の全面敵対と全面敵対――おそろしくセクト主義的発想であるとみられても仕方がない。そしてつまるところは止揚していくための党派闘争ではなく、主導権を握るための党派闘争である。しかし、そこには学生大衆の教育がある。学苑会とは学生を主体としてはじめて成立つものであって、決してセクトの主導権争いの場ではないはずである。

一方、反帝学評は翌十二日、たがに全学連（石井義一委員長）の「緊急声明」「大衆運動の敵対者」と攻撃する」を発した。

「ML派に対し、闘争の道義に基づいて自己批判を要求する。応じない場合は断固たる処置をとる」と問題に、全国全共闘からも「ML派の敵対行為は、全国全共闘の敵対者」と攻撃した。

「ML派に対し、闘争の道義に基づいて自己批判を要求する。応じない場合は断固たる処置をとる」と問題に、全国全共闘からも「ML派の敵対行為は、全国全共闘の敵対者」と攻撃した。

真の学苑会とは

ML・反帝学評襲撃

セクト発想を排し、大衆的に

6月12日襲撃学苑会学生大会の開催直前、ML派による二文自への襲撃、三十分にもおよぶテロ、リンチは一体何を意味するのか。この事は真剣に検討する必要性があるが、その検証としたちの運動の現在性があるだろう。

今大会に提出された文学部各クラス共同闘争の対案書が、圧倒的な支持（96対1）や大会議案書として可決されたという「事実」は、文学部における運動ークラス未来からの自己の行動委員会・闘争委員会運動の再構成化を推進してきた。これらの人間闘争、行動委は本格的なファシズムの攻撃に抗しうる自治会建設を目指して、文学部に出て肉をもった人間としての闘争、学生個人の実存の下への自己変革を不可欠とすることができないがゆえに、彼らは自己とのクラス行動委、闘争委（全学生委）による共同性を獲得しつつある）からの対案書に対して激怒し"反革命"という敵意ないしレッテルをはり、あえて敵からの徹底的な大衆総決算のクサバルトをおこなったのである。この事は学苑会運動の敗北行為であり、彼らの大衆運動の放棄以外の何物でもない。また彼らの発言をも意味する。

駿台文学会（二文自）はML派の暴挙に対し、いっさいの論理を排して「自己批判」を要求している。彼らは学生の社会的存在・行為能力喪失南過程として存在、そこから生ずる歴史形態の問題、学生個人の実存の下への自己変革を不可欠とすることができないがゆえに、彼らは自己とのクラス行動委、闘争委（全学生委）からの対案書に対して激怒し"反革命"という敵意ないしレッテルをはり、あえて敵からの徹底的な大衆総決算のクサバルトをおこなったのである。この事は学苑会運動の敗北行為であり、彼らの大衆運動の放棄以外の何物でもない。また彼らの発言をも意味する。

駿台文学会（二文自）はML派の暴挙に対し、いっさいの論理を排して「自己批判」を要求する。

また、明大の全ての学友諸君に対し現実の社会（本格的ファシズムの出現）に抗し、自らの存在の強化拡大をするなかから、ジワジワとした永続的な共同性の獲得（クラス、サークル未端からの自己変革の運動の中に構築することを駿台文学会は訴えたい。

駿台文学会事務長
大橋　啓一

襲撃事件に関する反帝学評の主張

大会を圧倒的に成功させた（6・14）今日までの反安保スト権確立）。さらにその内実化をかちとるべくそれクラス闘争委、行動委（共同体の中での結個人の変革）、真の共同性の獲得―団結）をっきいかつめることが、「ML派に対する疑問に答える」であると、一般的には推測されている。

ML派が襲撃事件に関する責解を出しているので、みてみよう。

「ML派に対する疑問に答える――学生大会流会の原因と政治的克服のために――」というビラである。

まず最初に「大会開催を不能に至らしめたことを深度におわびします」と謝罪している。「対案書」については次のようにいっている。「『対案』なるものは執行部の提起してきた運動を全面的に否定したときに初めて出されるものである。だから彼ら（反帝学評）が対案書を提出したことは、彼ら自身も参加している中執、自らも展開してきた運動をも否定している。また、全二部共闘に対する全面的敵対行為として、このこと（対案書提出）をとらえたが故に、翌十二日われわれのゲバルトを行使があったのである」と、対案書提出敵対視をとっている。また、対案書の内容についても「たとえ、なんらかの民青系の運動の現実的展開が全面的反革命として、提案した時、対案の中に暴力的敵対が不可避とされたように、学苑会中執および二部共闘の一切の運動に対する全面対決としてあった」としている。

対案書が本来執行部に対する全面的敵対行為としてあるものであるというが、何ゆえML派の出してきた本案、中執の独占問題は、反帝学評にしてみれば、同じように全面的敵対行為としようったことになろう。対案書はすべて敵対行為であると判断し、切り捨てようとするなら、二部全学生を代表しその運動を展開すべき学苑会執行部として無責任すぎる感がある。ML派が中執入場をもくろむ余りに、わざわざ出たようとしたとき、その故の全面敵対と全面敵対――おそろしくセクト主義的発想であるとみられても仕方がない。そしてつまるところは止揚していくための党派闘争ではなく、主導権を握るための党派闘争である。しかし、そこには学生大衆の教育がある。学苑会とは学生を主体としてはじめて成立つものであって、決してセクトの主導権争いの場ではないはずである。

一方、反帝学評は翌十二日、たがに全学連（石井義一委員長）の「緊急声明」「大衆運動の敵対者」と攻撃する」を発した。

「ML派に対し、闘争の道義に基づいて自己批判を要求する。応じない場合は断固たる処置をとる」と問題に、全国全共闘からも「ML派の敵対行為は、全国全共闘の敵対者」と攻撃した。

「ML派に対し、闘争の道義に基づいて自己批判を要求する。応じない場合は断固たる処置をとる」と問題に、全国全共闘からも「ML派の敵対行為は、全国全共闘の敵対者」と攻撃した。

「ML派に対し、闘争の道義に基づいて自己批判を要求する。応じない場合は断固たる処置をとる」と問題に、全国全共闘からも「ML派の敵対行為は、全国全共闘の敵対者」と攻撃した。